

東海学生テニス連盟主催大会の年間スケジュールに関する一考察

～東海学生テニス界活性化への提言～

A study of the annual match that the Tokai collegiate tennis association sponsors

— Proposal for activation of Tokai area collegiate tennis —

三 橋 大 輔

Daisuke MITSUHASHI

キーワード：学生テニスの活性化、大会の年間スケジュール、個人の競技レベル

Key words： activation of collegiate tennis, annual match schedule, player's game level

要約

本研究では、東海学生テニス界の活性化を促すために東海学生テニス連盟主催大会の年間スケジュールの問題点を明らかにした上で検討を加え、その解決に向けての提言を試みた。

検討の結果、問題の所在が(1)選手の競技レベルによる参加可能な大会数に相違が認められること、(2)大会開催時期の偏りがあること、の2点にあるとして、以下の提言をしたい。

○ランキング上位から下位まで幅広いレベルの選手が参加できる大会を新設する。

○現行のスケジュールの11月から1月の期間に上記の新設大会を組み込む。

今回は年間スケジュールの見直しという側面から活性化への提言をしたが、今後も他の側面からも東海学生テニス界の活性化を促すような提言ができるよう見守りたい。

Abstract

The collegiate student who belongs to the university tennis team participates in the matches that the Tokai collegiate tennis association sponsors. However, the number of matches is few in numbers. The lack of matches has the possibility to cause a decrease in the individual player's motivation.

The purpose of this research is to propose a new match scheduling system during the year that the Tokai collegiate tennis association sponsors to press the activation of the Tokai collegiate tennis.

As a result of the examination, two problems become clear:

(1) The number of games in which it can participate is different depending on the

player's game level.

(2) The period without the match is long, because the match concentrates at fixed time.

To solve these problems, it proposes the following two.

- It is necessary to establish a new system in which the players at various levels can participate.
- It is necessary to include new matches between November and January.

<緒言>

大学のテニス部に所属する学生が参加する大会は、主に学生テニス連盟が主催する学生公式大会である。参加の動機は様々であるが、テニスの競技力向上あるいは勝利を目指し参加する場合、充実した大学生活にするために参加する場合などが考えられ、いずれにしてもテニスが好きで、テニスの試合を多く経験することが目的でテニス部に入り大会に参加しているのは間違いのない事実であろう。

しかし、筆者の在住する東海地区における大学テニス部に所属する多くの学生から「年間の大会数が少ない」「実際の試合数が選手によってかなり異なる」などといった不満の声を耳にする。東海地区を勝ち抜き、その代表として全日本学生テニス選手権などに出場する一部の選手はともかく、そうでない選手の中には極端な例としては年間数試合だけというかなり少ない場合もあるようである。これではテニスの試合を多く求めて入部してきた学生が不満に思うのは当然であり、テニスに対するモチベーションが低下してしまう可能性がある。また競技力向上には試合を多く経験することは不可欠であり（三橋、2003）、全国トップレベルを誇る関東、関西地区に遅れをとっている東海地区としては、試合数の少ない現状ではその差を縮めることは困難かも知れない。これらのことから、大会数の少なさは東海地区における大学テニス界の発展を妨げる原因となる可能性が考えられるため、大会の年間スケジュールを検証し見直す必要があるのかもしれない。

そこで本研究では、東海学生テニス界の活性化を促すために東海学生テニス連盟主催大会の年間スケジュールの問題点を明らかにした上で検討を加え、その解決に向けての提言を試みた。

<大会の種類とその概要>

1. 東海学生テニス連盟主催大会

表1には、東海学生テニス連盟主催大会とその概要について記した。東海学生テニス連盟が主催する試合は、春季東海学生テニストーナメントなど6大会である。

a. 春季東海学生テニストーナメント

4月に開催され、全学年全選手が参加しもっともエントリー数が多い。また、8月に開催される全日本学生テニス選手権大会の東海地区予選を兼ねており、もっとも重要視されている。

b. 全日本大学対抗テニス王座決定試合東海地区予選

6月に開催され、ダブルス3ポイント、シングルス6ポイントの計9ポイント（女子の場合はダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイント）で争う大学対抗形式の団体戦である。そのシステム上、全部員が出場できるとは限らない。また10月に開催される全日本大学テニス王座決定試合（団体戦の全国大会）の東海地区予選を兼ねている。

c. 東海学生テニス選手権大会

8月に開催される。この大会で上位に進出すれば年末の東海学生選抜室内選手権に出場することができる。

d. 東海学生新進テニス選手権大会

9月に開催され、春季東海学生テニストーナメントおよび8月の東海学生テニス選手権で上位（シングルスでベスト16以上、ダブルスでベスト8以上）に進出した選手は参加することができない。

e. 東海学生選抜室内テニス選手権大会

11月に予選が、12月に本戦が開催される。11月までの東海学生連盟主催の試合で上位に進出

大会名称	開催時期	概要
東海学生春季 テニストーナメント	4月	全学年全選手が参加しもっともエントリー数が多い。また、8月に開催される全日本学生テニス選手権大会の東海地区予選を兼ねており、もっとも重要視される。
全日本大学対抗テニス王座 決定試合東海地区予選	6月	ダブルス3ポイント、シングルス6ポイントの計9ポイント（女子の場合はダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイント）で争う大学対抗形式の団体戦。10月に開催される全日本大学テニス王座決定試合（団体戦の全国大会）の東海地区予選を兼ねている。
東海学生テニス選手権大会	8月	春季大会に次ぐ大規模な大会。この大会で上位に進出すれば年末の東海学生選抜室内選手権に出場することができる。
東海学生新進テニス 選手権大会	9月	春季大会および8月の東海学生テニス選手権で上位（シングルスでベスト16以上、ダブルスでベスト8以上）に進出した選手は参加することができない。
東海学生選抜室内テニス 選手権大会予選	11月	11月までの東海学生連盟主催の試合で上位に進出した選手のみが参加することができる。
東海学生選抜室内テニス 選手権大会（本戦）	12月	その本戦。全国トップレベルを誇る関東地区、関西地区から有力選手を招待し開催される。
東海学生チャレンジ テニストーナメント	3月	年度内の東海学生テニス連盟主催大会で一度も本戦に出場することができなかった選手のみに参加資格が与えられる。

表1. 東海学生テニス連盟主催大会の概要

した選手のみが参加することができる。

f. 東海学生チャレンジテニストーナメント

年度末の3月に開催される。年度内の東海学生テニス連盟主催大会で一度も本戦に出場することのできなかった選手のみ出場することができる。

以上のように東海学生テニス連盟主催大会は、選手のレベルにより参加資格が異なる。

2. 全日本学生テニス連盟主催大会

表2に全日本学生テニス連盟主催大会とその概要について記した。全日本学生テニス連盟が主催する試合は全日本学生テニス選手権大会をはじめ3大会である。

a. 全日本学生テニス選手権大会

8月に開催される。文字どおり全国各地の予選を勝ち抜いた選手が集う、学生テニス大会の最高峰である。

b. 全日本大学対抗テニス王座決定試合

10月に開催され、ダブルス3ポイント、シングルス6ポイントの計9ポイント（女子の場合はダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイント）で争う団体戦の全国大会。各地区予選を勝ち抜いた計10大学のみが参加することができる。

c. 全日本学生室内テニス選手権大会

12月に予選と本戦が開催される。8月の全日本学生テニス選手権に対し参加人数枠が極端に少なく、8月の全日本学生テニス選手権で上位に進出した選手と、全国各地から推薦された選手のみ参加することができる。

これらのように全日本学生テニス連盟主催大会は、全国各地の予選を勝ち抜いた選手にのみ参加資格が与えられる非常に狭き門となっている。

大会名称	開催時期	概要
全日本学生テニス選手権大会	8月	文字どおり全国各地の予選を勝ち抜いた選手が集う、学生テニス大会の最高峰。
全日本大学対抗テニス王座決定試合	10月	ダブルス3ポイント、シングルス6ポイントの計9ポイント（女子の場合はダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイント）で争う団体戦の全国大会。各地区予選を勝ち抜いた計10大学のみが参加。
全日本学生室内テニス選手権大会	12月	8月の全日本学生テニス選手権に対し参加人数枠が極端に少なく、8月の全日本学生テニス選手権で上位に進出した選手と、全国各地から推薦された選手のみに参加資格が与えられる。

表2. 全日本学生テニス連盟主催大会の概要

<問題の所在>

表3に東海学生テニス連盟と全日本学生テニス連盟主催大会の年間スケジュールおよび各大会における参加資格の有無を示した。前項でも述べたように、選手の競技レベルによって参加できる大会は異なる。その相違点を明らかにするために、上位選手（全日本学生テニス選手権などに東海地区代表として出場するなど東海地区ではもっとも大会に多く出場するケース）と下位選手（もっとも試合数が少ないケース）とし、比較を試みた。

その結果、上位選手は4月の春季東海学生テニストーナメントからはじまり、6月、8月、10月、11月、12月とほぼ1ヶ月おきに参加できる大会が合計8大会ある。しかも8月のように同じ月に2大会ある場合もある。それに対し下位選手は4月の春季東海学生テニストーナメント、8月の東海学生テニス選手権大会、9月の東海学生新進テニス選手権大会、3月の東海学生チャレ

	東海学生テニス連盟 主催大会	全日本学生テニス連盟 主催大会	上位選手	下位選手
4月	東海学生春季 テニストーナメント		○	○
5月				
6月	全日本大学対抗テニス王座 決定試合東海地区予選		○	
7月				
8月		全日本学生テニス 選手権大会	○	
	東海学生テニス選手権大会		○	○
9月	東海学生新進テニス 選手権大会			○
10月		全日本大学対抗テニス 王座決定試合	○	
11月	東海学生選抜室内テニス 選手権大会予選		○	
12月		全日本学生室内テニス 選手権大会	○	
	東海学生選抜室内テニス 選手権大会（本戦）		○	
1月				
2月				
3月	東海学生チャレンジ テニストーナメント			○

○=参加資格あり

表3. 上位選手と下位選手における各大会の参加資格の有無

ンジトーナメントの4大会のみと、選手個人の競技レベルによって大会参加数に大きな差が認められる。

また大会の開催時期にも問題がある。上位選手の場合、4月から12月までの9ヶ月の間に8試合とバランスよく大会が開催されている。それに対し下位選手の場合、4月の東海学生春季テニストーナメントが終了後、3ヶ月を経て8月に東海学生テニス選手権、引き続き9月に東海学生新進テニス選手権が開催されるものの、それ以降は約半年間参加できる大会は無く、3月の東海学生チャレンジトーナメントまで待たなければならない。

これらのことから、問題点として以下の2点が挙げられる。

- (1) 選手の競技レベルによる参加可能な大会数の相違
- (2) 大会開催時期の偏り

<考察および提言>

- (1) 選手の競技レベルによる参加可能な大会数の相違

表3に示した上位選手が年間に8大会に対し、下位選手の大会参加数は上位選手の半分の4大会と明らかに少ない。さらに団体戦（全日本大学対抗テニス王座決定試合東海地区予選）以外の個人戦はすべてトーナメント形式でおこなわれるため、トーナメントの早いラウンドで敗退した場合、年間数試合をしただけで終わってしまうケースも実際にある。上位選手のように競技レベルの高い選手であれば、春季東海学生テニストーナメントで上位に進むことにより8月の全日本学生テニス選手権に、東海学生テニス選手権の上位に進めば12月の東海学生選抜室内選手権にそれぞれ繋がっておりシステム上必然的に試合数が増えることは仕方のないことではあるが、それらを差し引いても下位選手の参加可能な大会数は少ないと言わざるを得ない。

表4に、全国屈指のレベルである関東地区における関東学生テニス連盟主催大会の一覧を記した。基本的な大会数はほぼ同等であるが、注目すべきは11月から12月にかけて開催される「関東大学対抗テニス選手権大会」である。これはダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイント（男女とも）で争う団体戦形式であり、しかも大学から複数のチームを編成して参加することができ、より多くの学生に出場の機会が与えられている。また関東と同じく高いレベルを維持する関西地区においても、大学が所在する府県内でおこなわれる個人戦「関西学生地域トーナメント」が設けられ、やはりより多くの選手に出場機会が与えられている。

これらのことから、この問題の解決のために下位選手が参加できる大会を新たに設置することを提言したい。しかもチャレンジトーナメントのような本戦に出場経験のない選手のみが参加できるような大会ではなく、下位選手が上位選手と戦う機会を得られるような大会を設置することがモチベーションを高める上でも、競技力向上を狙う意味でも望ましい。かつてスペイン選手の多くが世界レベルへ急激な台頭を果たした背景には、スペイン国内の試合を増やし強化を進めた

大会名称	開催時期	概要	東海地区における 相当する大会
関東学生テニス トーナメント	4月	全学年全選手が参加しもっともエントリー数が多い。また、8月に開催される全日本学生テニス選手権大会の東海地区予選を兼ねており、もっとも重要視される。東海地区の春季大会に相当。	東海学生テニス トーナメント
関東学生テニス 選手権大会	8月	関東学生テニストーナメントに次ぐ大規模な大会。東海地区の東海学生テニス選手権に相当。	東海学生テニス 選手権大会
全日本大学テニス王座 決定試合関東地区予選	9月	10月に開催される全日本大学テニス王座決定試合（団体戦の全国大会）の関東地区予選を兼ねている。	全日本大学テニス王座 決定試合東海地区予選
関東大学対抗テニス 選手権大会	11月～12月	男女ともダブルス2ポイント、シングルス3ポイントの計5ポイントで争う団体戦。各大学複数チームを登録し参加することができる。	なし
関東学生選抜 テニストーナメント	2月	全大学、下級生の中から有望選手を選出しトーナメント	東海学生チャレンジ トーナメント
関東学生新進テニス 選手権大会	3月	年度内の関東学生テニス連盟主催大会で上位に進出できなかった選手のみ参加資格が与えられる。	東海学生新進テニス 選手権大会

表 4. 関東学生テニス連盟主催大会の概要

という事例があるが、やはり試合を多くこなし経験を積むことは競技力向上には必要であると考えられ、こうした機会を増やすことにより東海学生テニス界の活性化が促進されるかも知れない。

(2) 大会開催時期の偏り

もうひとつの問題点として、大会開催時期の偏りが挙げられる。下位選手の場合、現行の大会スケジュールでは東海学生新進テニス選手権大会後、約半年間参加できる学生連盟主催大会はない。スポーツの競技力向上のために出場大会の間隔をある程度空けることは必要であるが（村木、1994）、テニスは他の多くの競技とは異なり本来シーズンオフの無い競技とされ半年近く大会から遠ざかることはやはり長いと言わざるを得ず、このことはテニスレベルの低下に加え選手自身のテニスに対するモチベーションの低下を引き起こす恐れもある。

表4の関東地区の例では、「関東大学対抗テニス選手権大会」を11月から12月にかけて開催しており、前大会の関東学生選手権（9月開催）から2ヶ月、次大会の関東学生新進テニス選手権大会（翌年3月開催）まで3ヶ月と大きな間隔を空けることなく大会が開催されている。そういった点では大会開催時期の偏りというものがあまり感じられない。

そこでこの問題に対しては、関東地区の例を参考にし上記（1）で記した新設大会を11月から

1月に開催することを提言したい。これにより各大会の間隔が最大でも3ヶ月と狭まり、大会の無い期間が長いことによるテニスレベルおよびモチベーションの低下を防ぐことができるかも知れない。

まとめとして、本研究では東海地区の学生テニス界を活性化させるために東海学生テニス連盟主催大会の年間スケジュール見直し検討を加えた結果、以下の2点について提言をしたい。

○ランキング上位から下位まで幅広いレベルの選手が参加できる大会を新設する。

○現行のスケジュールの11月から1月の期間に上記の新設大会を組み込む。

これらの提言が東海学生テニス連盟に受け入れられ、東海学生テニス界の活性化に向けて生かされることになれば幸いである。

今回は年間スケジュールの見直しという側面から活性化への提言をしたが、今後は他の側面からも東海学生テニス界の活性化を促進できるような提言ができるよう今後も見守りたいと考える。特に東海地区の大学テニスのレベルと関東や関西との差は深刻であり、全日本学生テニス選手権で各地区に与えられる出場選手枠数の差がそれを物語っている（男子シングルスでは全出場者数128名のうち、関東は57名、関西32名、東海8名）。この現状を打開するための提言をすることは急務かも知れない。

<参考文献>

- 三橋大輔、2003. 男子学生テニス選手における競技力向上に関する事例的研究. 東海学園大学学術研究紀要 第8巻 第2号: 143-152.
- 村木征人、1994. スポーツ・トレーニング理論. ブックハウスHD。